
trying

みうらいさお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

trying

【ZPDF】

Z9089C

【作者名】

みうりこわお

【あらすじ】

以前のトラウマから何事にも本気で打ち込めない少年、悟が友人の見舞いに行つた病院で出会つたのは、長く入院している同じ年の少女だった……。

プロローグ

「はあつ、はあつ」

走っている。僕は今、走っている。どうして？わからない。でも、走らなければ行けない気がする。

ここはどこだ？どこを走ってるんだ？真っ暗闇で何もない。その中を僕は走っている。

ふと見ると、前を誰かが走っている。金髪の、僕と同じ年ぐらいの男。アイツを追いかけているのか？しかし、一向に差は縮まらない。それどころか広がっていく。

「そつそつ」

尚も走り続けている。と、目の前に光が見える。あそこがゴルか？そこまで行けばいいのか？僕はスパートをかける。

と、金髪の男が立ち止まって、じつちを見ている。そして、僕に吐き捨てるよつて言つた。

「お前みてえに才能ない奴、頑張つたってしょうがねえんだよ。」

それを聞いた途端、足が止まってしまった。走ることが出来ない。光は、どんどん小さくなつて、消えてしまった。

第1章『出会』

ふと気がつくと、僕 会田悟は、自分の家のソファに横になっていた。

「夢か……」

テレビを見ると、さつきまで野球をやっていたはずなのに、ゴルフの中継になっている。結構眠っていた。

「あ～あ……」

中途半端に寝たので気分が悪い。さらにあんな夢を見たので機嫌も悪い。僕はずっとぼーとしていた。

ふと、玄関の方からガチャガチャと音がする。誰か帰つて来たようだ。

「ただいま。何、またテレビ点けっ放しで寝てたの？」

姉の真理だ。近くのT大に通っている。昔から男勝りで気が強く、小さい頃はよく泣かされた。

そんな感じなので彼氏はなかなか出来ない。まさに男女といつ……

「何が言った？」

「の邊でやめとこひつ。

「それにしても休日に家でダラダラじゅうじゅう。他にやることないの？」

「うぬせーね。」うちちは普段部活で疲れてんの

「何才ヤジみたいなこと言つてんの。まつたく、暇してんだつたらお見舞いにでも行つたら？」

「お見舞い？」

「剛君よ。ほり、この間怪我したつて言つてたじゃない？」

「ういえ、そんなことがあつた。剛とは僕が幼稚園から一緒に、いわば幼馴染みだ。

サッカー部だが、この間の試合で骨折して、入院したらしい。お見舞いに行こうと思つてはいたので、今日行くのも悪くない。

そして僕は剛のいる病院に向かつた。途中、さつきの夢のことを考えていた。

（また見ちゃつたな……）

僕は中学の頃、陸上部だった。入部当初、顧問の先生に言われた。「いいか、短距離は多少才能に左右されるが、長距離は努力なんだ。頑張れば頑張るだけ速くなる。そしたら、一番にだってなれる」

その言葉を信じた僕は、頑張つて練習した。そのかいあって、県大会まで進んだ。が、その予選の時だった。

金髪の男 高見総一郎がいた。奴は県でも有数の選手だった。レースでは、当然のように大差をつけられ、負けた。

途中まで奴のハイペースについて行こうとしたが、結局スタミナ切れし、最下位に終わった。

レースの後、奴は僕にこう言った。

「お前みてえに才能ない奴、頑張つたってしょうがねえんだよ」

さらりと客席から「ダッセエ」と聞こえた。

それ以来、僕は頑張ることを止めてしまった。が、高校に入つてからも、陸上部に入つている。

何故なら、陸上が好きだから。なんてカッコいい理由じゃない。自分でもわからないが、なんとなく、惰性でやつてているようなものだ。

そんなことを考へるうち、いつの間にか病院の前に来ていた。

(学校の真ん前なんだな)

見るといすゞ横手に、うちの学校のグラウンドがあつた。

「すいません、草野剛の病室はどうですか？」

「3階の一一番奥の部屋です

「どうも」

3階の奥……一際大きな笑い声がする。

(あそこか……)

部屋に入ると、怪我しているとは思えない元気な奴がそこにいた。

「よひ、悟ーー元気か?」

「お前程じやないよ」

見ると足が上から包帯で吊られている。一応怪我人は怪我人らしい。

「なんだ、元気ねえな」

「ああ、ちょっとな」

「……また、あれ見たのか

「まあ、な」

剛はびっくりせんべく察したらしく。ここには何でもお見通しだ。

「つたぐ、こつまでも昔のことやウジウジしてんなよなー」

「わかつてゐよ。言わねなくとも……」

「まあ、元気出せや。過去のことだ、キッパリ忘れてな」

「怪我人が言つてもな……」

「ん？ あ、そりゃそりだー！」

ガハハとまた大きい声で笑う。

「お兄ちゃん！」本よんと……。」

「やめたい……。」

剛の弟と妹だ。6才の双子だ。やめたいやかだつたのは、この二人の相手をしていたからだらう。

「わーったよ！ 読んでやるからー。」

「じゃあ、俺そろそろ帰るよ。」

「やつか。悪いな。」

「気にするなよ。」

部屋を出ようとすると、剛が呼び止めた。

「悟、何なら屋上に行つてみるよ。あそこから見る夕焼けは凄いんだ。悩みも吹つ飛ぶわ。」

「ふうん。」

特に急ぐ用事もないのに、行つてみることとした。階段を上りきり、ドアを開けると……。

「うわあ……。」

そこには見たことないくらいに綺麗な夕焼けがあつた。本当に空一面オレンジ色で、それはもう、テレビでしか見たことがないような景色だった。

(確かに、悩みも吹っ飛びそうだな)

十分に夕焼けを堪能したので、帰ろうとした時、視界に女の子が入った。誰だろう。患者の子だろうか?

年は同じくらい。背はやや低め。髪は肩の辺りまでかかっている。そして屋上の端の方で、じっと下を見ている。その顔はどこかかなしげだ。

(まさか……)

僕は嫌な予感がしてきた。しかし、それをなんとか打ち消そうとした。まさか、そんなわけないさ、ただ下を見ているだけさ。飛び降りようなんてことは……

と、そのまま金網に手を掛けた。

(やばい……)

やつぱり自殺か?どうする、誰か呼んで来るか?いや、そんなヒマはない!

「待つて!!」

僕は彼女の方へ走つて行つて彼女を止め……ようとした。しかし、

志半ばで転倒した。彼女はそれを呆気にとられた様子で見ていた。

それが、2人の出会いだった。

第2章『音色』

「あははははーー！」

またも病室に馬鹿でかい笑い声が響き渡る。

「それで助けようと思つてズッコケたのか！バッカでー！」

例の女の子に会つた次の日、また剛の見舞いに来た。そして昨日のことを話してみるとこのあります。

本当にでかい声だ。剛の病室は3人くらいの相部屋だが、他の2人は最近退院したらしく、今は剛1人だ。

だが、それは幸いだつた。何故なら、他に誰かいる時にこんなでかい声で笑おうもんなら、どんなに怒られたかしれない。

それにしてまだ笑つてゐる。僕はいい加減腹が立つてきた。なのでギブスを軽く小突いてやつた。

「おおは……」

痛そうだ。どうやら怪我人は怪我人らしい。

「いてて……」

ギブスを擦る剛。昨日の子だが、どうやら別に死のうとしていたわけではなかつたらしい。ただ夕焼けを見に来ただけだという。

「またやつちやつたな……」

僕は人に言わせると、ちょっと抜けているらしい。所謂「天然」というヤツなんだそうだ。

みんなは悪い意味で使っているのではないんだけど、何だか言われてあまり気分の良いものではない。

だって、いつも真面目にやつてるのに、笑われたりすることもあるのだ。そんなの、たまたもんじゃない。わりやあ、よく転ぶし、忘れ物は多いけど……。

「まあ、でもお前らしいよ」

さつきまで痛々で悶えていた剛が座り直す。ようやく収まつたようだ。

「その子が本当に死んじゃうんじゃないからって、ほつとけなかつたんだよな。そういうの、悪くないぜ」

さつきまで爆笑してた奴の台詞とは思えない。でも、それで少し機嫌が直った。

「それで? その子とは何か喋つたりしたのか?」

「……いや、別に」

「何で? そんなチャンスめつたに無いぞ?」

「それが……」

実は飛び降りようとしたのでは無いとわかつた後、何だか恥ずかしくなつてそのまま帰つてしまつたのだ。だから名前も「」に入院してゐるのかどうかもわからぬ。

「か～もつたいねえ！」

自分のことの様に悔しがる剛。

「俺だつたら絶対にその場で口説いたのになあ！」

剛は典型的な女好きで、かわいい娘を見掛けでは、声を掛けずにはいられない、というような奴である。あの場にいたのが剛じゃなくてよかつた。

すると、看護婦さんが入つて來た。そろそろ帰つた方が良さそうだ。

「じゃあ、また来るよ」

「おひ、またな。」

剛の病室を出た後、時計に手をやつた。5時を少し過ぎたぐらい。昨日あの娘にあつたのと同じくらいの時間だ。

（じゅうじ、もう一回行つてみるかな……）

どの道後は帰るだけだつたし、また夕焼けを見てから帰るのも悪くない。それに、もしかしたらまたあの娘に会えるかもしれない。

屋上に出ると、昨日と同じよう夕焼けが広がつていた。やっぱり

ここから見る夕焼けは凄い。本当に空一面オレンジ色で、下の町並みを見ると、えらく小さく思えた。

そして僕は夕焼けに見とれながらも周りを見渡して見た。

(……いた!)

やはりいた。昨日と同じ所に。僕はゆっくりと彼女の近くへ歩いて行った。近くで見ると、その姿は綺麗だった。思わず見とれてしまう。

と、視線に気付いたのか、その娘がこっちを向いた。僕はドキッとする。

「や、やあ

僕はぎこちない挨拶をする。

「よ、よくここに来てるの?」

彼女は少しごこつちを見ると、また正面を向き直した。ちょっと間が出来る。

「……」

その娘が口を開いた。

「入院したての頃に、看護婦さんが教えてくれたの。凄いんだよつて」

「やつなんだ」

「やれで、キミの恋いつき、やべりに来てるの」

少し微笑む。

「長こ」と入院していると理由で、JURIに来るのが楽しみなんだ

「どのへりここなの？」

彼女は側のベンチに腰掛け、少し考える仕草をする。

「もへ、一年ぶりこかな？」

「やんなこ……」

僕も隣りに腰掛け……やつとしたら、ちょっと離れて座った。この根性なし、と頭の中で誰かが言つ。じょうがないだろ、とそれに言い返す。

なんせ僕は女の子と付き合つたことなんてなかつたし、あまりまとも話したこともなかつたのだ。

「でも、昨日は驚いた。だつてキミがいきなり走つて来るんだもん」

「あ、あれは……」

「私を助けよつしてくれたんでしょう？なんだか嬉しかった。ありがとう」

そつと言つて向けられた笑顔に、僕は思わず目をそらしてしまった。

「あつ、名前言つてなかつたね。私、高木凜」

高木凜……どこかで聞いたような。何処でかはわからないが、初めて聞く名前ではない気がした。

「よろしく、僕は……」

「会田悟君でしょ？」

驚いた。彼女は僕の名前を知つていたのだ。

「えつ、俺のこと知つてるの？」

当然の疑問を投げ掛ける。すると彼女は立ち上がった。

「そろそろ部屋に戻らなきゃ」

クルッと振り返り歩き出す。が、途中でつまづいて、よろける。

「危ない！」

僕はとつさに抱き抱えていた。

「ありがと。また助けられちゃつた

凜はニーッと笑う。僕はそのまま、彼女の病室までついて行った。

病室は3階の、剛の病室とはむしろ対側にあった。凜は、ベッドに腰掛ける。

「さつ めの話……」

「え?」

「何でキミのことを知ったかって言うとね……」

「言いながら、窓の方を向く、そつちを見ると、見慣れた光景があった。

「グラウンド……」

それは、僕が普段部活で走っている、学校のグラウンドだった。

「こつもあそこを走ってるでしょ? 私走れないから、こつもここから見てたの」

「どうが。ここは学校の近くだった。ん、学校?」

「あ? ……」

僕はハッとした。さつき気になつたことがわかつた。

「もしかして、1年の時に同じクラスだった?」

「……覚えててくれたの?」

彼女は嬉しそうだ。そう、僕は彼女と同じクラスだった。ただ、入

学式から数日して、すぐに入院してしまったため、話したことはなく、いつも席が一つ空いていた。

「クラスの子は、来たりするの?」

彼女は首を横に振った。

「ううん、ほら、私入学式のちょっと後には入院しちゃったから、友達ができる間もなくて」

それにしたつて全然誰も来ないなんて、薄情なもんだと思つ。自分 のことは棚にあげて。

「お父さんとか、お母さんは?」

また首を横に振る。

「2人ともね、仕事が忙しくて。お父さんは仕事柄、よく海外に出張に行くんだ。でもそれだけじゃ足りないからつて、お母さんも働いてるの。休の日には、たまに来てくれるんだけど」

「やつか……」

どうやら凜は独りぼっちのようだ。一人でこんな所にいるのが、どう にか寂しいだろう。

それでも彼女は平氣だよ、とでも言つてうに笑つてみせる。何かしてやれることは、ないだろうか。

「じゃあ、俺が……」

「え？」

「俺がさ、およくちよく来てさ、話し相手になるつてこいつのは……
だめかな？」

僕はちよつと勇気を出して言つてみた。彼女はちよつと驚いた顔をしている。が、

「本当ー？」

初めて聞く大きな声だ。どうやら喜んでくれているようだ。少しホッとした。

ふと、凜の側にキーボードがあった。

「これは？」

「それはね、お母さんが使つてたのをもらつたの。私、小さい頃から体弱くて、外に遊びに行けなかつたから、いつも家の中で弾いてたんだ」

確かに、年季の入つた感じがする。

「じゃあさ、何か弾けたりするの？」

「ええ」

「ちよつと、弾いてみてよ。聴いてみたいな」

「うん、わかった」

そう言つて彼女はキー・ボードに向かう。そして指を動かしていく。その指をばきと同時に、いくつもの音が生まれていく。

その音と音とが重なり合つて、いくつものハーモニーが生まれていく。

（うわあ……）

僕はクラシックなんてわからない。これが誰の何という曲かもわつぱりだ。けれど、彼女が奏でる音色は、不思議と僕の胸に響いた。楽しげだつたり、時に激しく、優しくもあり、でも、どこか寂しげであるようにも感じられた。

弾き終わつてこつちをみた凜の顔は、少し驚いたようだつた。

「どうした……」

すぐに気付いた。僕は、不覚にも涙を流していた。

「まひつたな……」

「ふふふ……」

「ははは……」

2人して、笑つた。これから何か、素敵なことが待つていそうな気がする、そんな再会だった。

第3章『将来』

「それでさ、階段3段飛ばしで走つてさ」

「えつ、そんなに?」

「これは間に合つてしまいかと思つたんだけど、あと一歩及ばなくて」

「遅刻しちゃつたの?」

「これが運のいい」と一時間田は先生休みで自習でね

「わあ

あれから何度となく、凜の病室に来るよつになつた。夜の7時頃までは面会時間になつてゐるらしく、部活終わりに寄つたりする。

学校でこんな話があつたとか、テレビがどうだとか、音楽の話とか……。たわいのないこと話をしている。

凜も色々と話を聞かせてくれた。自分の小さい頃の話、引越ししてしまつた友達の話、両親の話……。

この間、出張中の父親から手紙が来たらしい。凜はそれを大層嬉しそうに見せてくれた。

「ふうん、それで最近来てくれなかつたのか

膨れつ面をして囁つ剛。

「へんりつ、俺だつて寂しいだろ? つーへ。」

「よせよ、気味の悪い」

ブーッと熱に膨れる。女の子がしたらきっとかわいいのだりつが、剛がやると何も感じない。不思議なものだ。

「でもや、こいじやん、アツアツでぞ」

「アツアツで……そんな感じないよ」

「どうだかな。お前はそいつでも、向いつけ案外その気がもよ」

「まさか。友達つてぐらになんじやない? 俺、あんまりそいついう経験ないからわからねえよ」

「ふうん。ま、いいや。今日ももう会つたのか?」

「これから行くとこだよ」

「わつか。出来れば俺のことも紹介してくんない?」

「ん……まあ、考えとくよ」

そして凜の部屋へ向かう。剛には紹介してくれと頼まれたが、当分しないでおこうと思う。なんだかもつたいたい気がするからだ。

「ノンノン、ヒノックを2つしてから入る。」

「よつ

「ひさんてむせび

凜は皿を擦っている。

「あ、ひょつとして、寝てた?」

「うん、少し……」

「悪いことしちゃったなあ、起しちゃった」

「うつさん、平氣

そして例ごみて会話に興じる。凜はまだ少し眠そだつたが、色々と話した。不思議なもので、彼女にはなんだか話したくなる。

「その袋……」

と、凜が僕が手に持っていた袋を気にする。

その時僕は、普段部活の時に履いているランニングシューズを持っていた。

いつもは学校に置いて帰るけれど、明日は競技場で練習するため、持つて帰ることにしたのだった。

「ああこれ?ランニングシューズだよ。いつも部活の時に使っているんだ

「どうのくらご使つてゐるの?」

「さうだなあ、陸上始めたくらごの時だつたから……」

「そんな前から……?」

凜は驚いた様子だ。陸上を始めて間もない頃、親父とシューズを買
いに行つた。その時に親父にどうせでつかくなるんだからつて言わ
れて、サイズの大きめな靴にした。

だが、中々で身長が伸びなくなつて、結局そのまま使つてゐる。

「もつそんな使つてゐるもんだから、こんなになつちやつて

袋からシューズを取り出す。もつスッカリボロボロで、爪先のあた
りがパツクリ開いてゐる。踵もちょっと剥れそつだ。

「うわあ……」

凜はまじまじとその靴を見つける。

「こんなになるまで使つなんて、悟君は本当に走るのが好きなんだ
ね

「そうだよ、とは言えなかつた。正直なところ、始めはそうだつたろ
う。でも、例の出来事以来、わからなくなつてしまつた。

「どうのかな、その辺よくわかんないんだ。ただ何となくやつて
る気がする

「やつなの？」

凜は不思議そうだ。

「でもや、なんとなくやつてる人の靴が、こんなになるかな？」

「そりゃあ、4年も使つてれば……」

凜はまだ納得がいってない様子だ。

「でも、適当にやつてる人が4年使つたとしても、ソレがどうならないと思つた。努力してきたからだよ」

凜はさりげに続ける。

「それで、そんなに努力出来るつてことは、やっぱり悟君はや、心の底では走るのが好きなんだと思つた」

そう言つて凜は笑つ。確かに一理ある。嫌いになつたのなら辞めてしまえば良いくのに、まして高校でも陸上を続けることなんてなかつた。

それでもやつていたのは、意志が弱いから、惰性でやつていいと思つてたけど、もしかしたら、やっぱり走るのが好きだからかもしれない。

「あ、『めんなさ』、偉やつないと書つて」

「いや、ここんだ。またゆっくり考えてみるよ」

「うそ

と、シユーズの袋から一枚紙が落ちた。

「あつー。」

「どうしたの?..」

「これ、明日までの忘れてた。」

それは進路希望調査のプリントだった。先週ぐらいに渡されたのだが、その時は急いでいて、袋の中に入れて、それっきりだった。

「進路希望があ……どうするの?..」

「わかんないなあ……。」これといつてなりたい物もないし。普通に大学行くかな

「そつか

「凜は何かある?進路つていうか、将来の夢とかさ」

凜はフフッヒ笑つて囁つ。

「あるよ

「えつ、何々?..」

「何だと思つ?..」

何だろう。考える。しかし、勘がよくない僕は見当違いの物しか思いつかない。

「わかんないや。何になりたいの?」

「あのね……」

すい、と深呼吸をする。

「ピアースト」

「そうなんだ。どうしてなりたいって思ったの?」

「あのね、遊びに行けなくて辛い時、ピアノを弾くと、何だか救わ
れて、楽しくなって。だから、大きくなつたら今度は私が沢山の人
をピアノで楽しませたいって思つて」

「そうなんだ」

「こっからは、ヨーロッパで音楽の勉強をしてみたいんだ」

僕は素直に感心してしまった。それまで考えているなんて。

「でも、私病気してるから、とでも……」

「できるわ」

僕は立ち上がっていた。

「それを治すために病院にいるんだろ？だから、わざと行けるよ

「悟君……」

「俺、頑張ってみる。だからわ、頑張るつよ

凜はうん、とニコニと笑った。彼女のおかげで、ちょっとだけ前向きになれた気がした。

そして、彼女の将来の夢を、僕も応援したいと思った。

第4章『衝突』

5月も半ばになった。だんだんと暑くなってきて、もう半袖で過ごすようになった。

「それでさ、その時アイツが……」

「くえ」

今もまた凜の病室に来ている。この所毎日来ている気がする。凜はいつも笑って話を聞いてくれる。ただ、今日はどこか様子がおかしい。

「どうしたの？体調悪い？」

「ううん、それは大丈夫」

とは言つものの、どこか浮かない顔をしている。

「あのね、悟君」

と、凜がこちらへ向き直つて言つ。

「その、最近いつも来てくれるけど、いいの？その、勉強とか、部活とかで忙しくない？」

意外な質問だった。

「何で？別に大丈夫だよ？」

「でも、たまに凄く疲れてそつた時とかあるし……。それに、テストとかもあつたんでしょ？私は来てくれたなら嬉しいけど」

凜は俯いている。

「大丈夫だつて！心配すんなよ」

そつ言つと凜は「うん」と言つて笑つた。しかし、いつものようなそれではなかつた。

「じゃあ、今日はいれで帰るよ。明日試合があるんだ」

「そつか。頑張つてね」

「おひ」

そつ言つて家に帰つた。

「ただいま」

「ちよつとアシタ、何よこれー。」

帰るなり姉が大きな声で言つ。見るとこの間の中間テストだ。部屋に無造作に置いていたのを、姉が見つけたらしい。

「全部平均より下じゃないー。」

「ひなせこな、良いだろ別に」

「でもアンタ、去年はもう少しあがつたでしょ。こればかりは落ちすぎよ。」

「そりゃあ、そんな時もあるんじやない?」

僕は面倒臭くて適当に受け答えする。

「あの娘の所に行くなつてからね

実は姉には凜のことを少し話していた。僕はそのまま2階へ上がりうとしたが、その一言で立ち止まる。

「どういふこと?」

「だって、あの娘に会つたのは4月頃でしょ? その頃から成績が悪くなつてるし」

「……凜は関係ないだろ

「でもあれから帰りが遅くなつて、勉強しなくなつたのは事実でしょ? そりゃ、会いに行くなとは言わないけど……」

「……何が言いたいんだよ」

僕はなんだかイライラしてきた。喧嘩腰になつてしまつ。

「言いたくないけど、あの娘は病人なのよ? 毎日のよつとマンタと喋つて、疲れないわけないでしょ?」

「わかつてゐよ

「それにアンタだって成績こんなだし……」

「わかつてゐつて言つてんだろ」

僕は2階へ駆け上がりで行つた。明日は試合だし、もう寝ようと思つた。しかし、姉の言葉、そして凜の言葉が頭から離れない。

2人ともなんだか、同じことを言つてゐるよつに思えてくる。

何だらう？ 凜は俺を気遣つてくれている風だつたけど、本当はもしかして、遠回しに来るなつてことなのか？

いや、まさか、そんなはずは。だつて凜も来てくれるのは嬉しつて言つてたぢやないか。

でも、それは凜の優しさで、本当の所は結構無理してるんだらうか？

「あ～やめやめ！」

僕は首を振りて、考へていたことを打ち消した。今は、明日のことだけを考えよう。明日は試合だ。

1年の時は、怪我とかもあつて、試合には出られなかつたので、中学生以来となる。そう、あの日以来だ。でも、多分大丈夫だ。

そうだ。試合が終わつたら、凜に会つて、試合のこと話をうつ。きっと笑つて聞いてくれるはずだ。

翌日、県営の陸上競技場。今回は公式戦なので、8円のエントリで続

いている。負けたら終わり、まさに1回1回が1発勝負だ。

同じ長距離パートの部員とアップをする。しかし、まだ昨日言われたことが引っ掛かっていた。結局、あれこれ考えてしまって、あまり眠れなかった。

「……会田、会田ー」

「えつ？」

ふと見ると、他のみんなは走り終わっていた。

「どうしたんだ？ 何かボーッとしてた？」

「いや……」

「何か悩みでもあるのか？」

キャプテンの先輩が、心配そうに尋ねた。

「あ、大丈夫です。何でもないです。昨日、あまり寝てなくて」

「何だ、緊張でもしたか？」

「ええ、まあ」

本当はそんなんじゃなかった。でも、今日は先輩達には最後のチャンスだ。余計な心配をかけさせるわけにはいかなかった。

そして何より、自分も試合に集中しよう。そう自分に言い聞かせた。

「ただいまの男子100mの結果は……」

地区大会が始まった。やはり思うに、こうこう類の物は残酷である。コンマ1秒、瞬きをするぐらいしか差がないとしても、落ちる人がいる。トイレやロッカールームで泣いている人を、何人か見た。

「男子500mに出場する人は……」

どうやら時間らしい。僕はユニフォームを着て、召集場所に向かった。

500mというのは、400mトラックを12周半走る。そして、タイムで上から24人が次の県大会へ進むことが出来る。

「次の組!」

出番だ。胸の高鳴りを抑えつつ、僕はスタート地点に立つた。レースでは走つたことはないけど、練習ではよく走つている距離なので、特に問題はない。そう思つていた。だが……

「パン!」

レースがスタート。と、すぐに違和感に気付いた。

(何だ? 足が……)

足が信じられないほど震えている。心臓も高鳴りを増している。これが実戦の緊張感なんだろ? うか。

(落ち着け、落ち着け)

何とか自分を落ち着かせようとする。やつこつして、ひかこ、ひかこ、3周ほどすぎる。先頭は随分前にいつてしまつてこる。

(くそつ、こんなにキツかつたか?)

僕は軽くパニックになつていた。さらにレースは進み、僕は7周目を過ぎた所だ先頭は8周目らしいけど。

ふて、スタンドから声が聞こえる。

「急げーー!失格になるぞー!」

僕は少しして、その意味する所がわかつた。先頭がすぐ近くまで来ていた。

こつこつレースでは周回遅れといつのは必然的に出て来る。そこで、3000mを越えて周回遅れになつた者は失格になつてしまうのだ。僕は抜かれまいと踏ん張る。が、その時客席から

「ダッセエな」

という声が聞こえた。もしかしたら自分に言つたのではないかも知れない。だが、その一言があの記憶を甦らせる。

結局僕は、それで足を止めてしまった。

「はあ……」

地区大会が終わり、みんなが帰る中、僕は一人、近くの公園のベンチに佇んでいた。

(何も変わつてないな……)

あの時、「ダッセH」と聞いた時、例の高見の台詞も思い出して、もうこいやつていう気持ちになつた。やはり「あの」出来事は、今でも暗い影を落としている。

(どうすつかな……)

凜の所に行くか迷つた。こんな結果で、どの面下げて行けつてんだ。でも、結局行くことにした。慰めて貰いたかったのかもしれない。

「よつ」

「「Jさんにむかは」」

それから色々話をする。しかしやはり凜はあまり元気がない。

「それどう……ねえ、聞いてる?」

「え? う、うん」

「どうしたんだよ、ボーッとしてん」

「ううん……」

凜はどこか上の空だ。ふと、Jさんにむかはをして言つた。

「 セウ言えば、今日、試合だったんだよね？どうだった？」

「 だめだった」

「 セウ」

僕はわざとりしゃく笑つた。

「いやー、ダメだったな。やつぱり勝負の世界は甘くないよな。ハハハ.....。俺ダメだな。陸上も勉強もさ。テストも赤点取っちゃうし.....」

凜は慰めてくれると思った。しかし、彼女は思い詰めた顔で言つた。

「私の.....せい？」

「な、何言つてんだよ。そんなわけないだろ？」

「でも、最近無理してる風だつたし、テストだつて、私の所にずっと来てたから、ちゃんと勉強できなかつたんじや.....」

「だから違つつてーー！」

思わず声を荒げてしまつ。何だ？何でそんなこと言つんだ？僕は混乱してきている。

2人の間に沈黙が流れる。

「何だよ、昨日もそんなこと言つてたよな。ここに来て良いのかって

僕の中で、凜と姉に言われたことが、ぐるぐると回っていた。

「何なんだよ、来て欲しくないんだつたら素直にそう言えよ」

「やつ、そんなこと……」

「やつこのひどだろ？俺が無理してるとか、自分のせいだとか言つて、本当の所は鬱陶しいから来るなつてことなんじやないのか？」

「そんなー。」

凜も声が大きくなる。むちゅくちゅ言つてるのはわかつてた。でも、溢れる感情を抑えられなかつた。

しばしの沈黙。……。そして、

「じゃあ、どうして来てくれるの？」

凜が口を開いた。

「それは……」

「ねえ、どうして？」

僕は答えられず、口元もつてしまつ。

「私が独りだから？」

「え？」

「私が独りぼっちで可哀相だから? それで来てくれるの?」

「何言ひて……」

「同情して来てくれるの?」

「それは違……」

「じゃあ何でー?」

見ると凜は田の涙を溜めている。僕はやはり答えることが出来ない。
「そんな」と、考えたことはなかったのだ。

「せひ、答えられない」とは図星なんだー可哀相だから、同情して来てくれるんだー!」

「だからそれは……」

「もうこ……」

病院中に響き渡らんばかりに声を張り上げる。

「そんな同情とかで……来てくれるんだつたら……もう、来てくれなくでいいー!」

凜はもうボロボロと涙をこぼしていた。

「だから違つ……」

と、そこへ看護婦さんが入つて來た。

「ちゅうとー、ひるをこですょー。病院こは他こも患者さんかいるんですよー?」

「す、すいません……」

「もう、静かにして下さこよ?」

それだけ言つと、看護婦さんは出て行つた。またしても沈黙。凜は全くこちらを見ない。僕は何も言わず部屋を後にした。

僕は階段を降りながら考える。今ならまだ間に合ひ。戻つて謝るか?でも何を?俺が悪いのか?それに行つた所でまともに取り合つてくれるのか?でも、帰つたらこれつきりになつまつんじや……。それでもいいのか?

もう外に出て來ていた。やり場のない怒りを、夜空に向かつて叫んだ。

「もう……何だつてんだよ!……」

その声は、頭上に広がる黒に吸い込まれていった。

第5章『素直な気持ち』

あれから3週間がたとづとしていた。僕は結局、あれ以来一度も凜に会いに行つていない。あんなことがあって、自分でもどうなのかよくわからなくて。

さらに期末テストも近いので、勉強もしなければいけなくなり、色々忙しいといふのもあいまつて、行かなくなつた。

「はあ……」

たまにグラウンドから病院の方を見てみるが、凜の部屋のカーテンは閉まつたままだ。ただ、明かりが点いているので、退院したとかではないようだが。

「同情で来てくれるんなら、もつといい……」

あの言葉が、今でも頭の中で時折繰り返される。同情のつもりで行つてたとは思わない。でも、それならどうして行つてたんだろ？
それがわからない以上、あんな風に言われても仕方ないのかな。

「じゃあ明日からテストだから、ちゃんと勉強しとけよ？」

そうだった。明日からテストなのだ。とりあえず帰つて勉強をしよう。そうしたら、少しばかりが紛れるだろう。

しかし、それは甘かった。考えなによつにすればするほど、かえつて気になつてしまつ。おかげで全く勉強に身が入らない。

「何なんだよ……」

僕はやる気を無くして寝転がる。すると、部屋のドアがノックされる。

「悟ー、友達が来てるわよー。」

「友達?」

誰だと思いつつ、玄関へ。

「よつ、久し振り!」

そこにはギップスも何もしていない剛がいた。退院したらしく。

「昨日退院したんだよー。」

「で、何だよ?俺今テスト勉強してんだけど」

「なーにがテスト勉強だよー。どつせやる気無くして寝てたんだろ?」

悲しいかな、団星だった。仕方無く、剛を部屋を招き入れる。

「まあまあ、せっかくじつじつとノロケ話を聞きたくて来てやつたんだから」

「ノロケ話?」

「ほれ、あのお前がよく会つて行つてゐる娘だよ」

「ああ……」

僕は少しためりつてから言った。

「行つてないんだ。しばりへ

「え？ 何で？」

僕はこの間何があつたのか話した。剛も顔が真剣になる。

「なるほどねえ。そんなことじが

「それでさ、なんか行けなくなつちやつて、彼女、もつ俺に会いたくないだらつし、行つて無理させるのもな……」

剛は少し考えてくる。そして、いつまでもつすぐ見て壁。

「お前さ、彼女がどうこうつ気持ちでそつとつたと想つ?」

「え？」

「だから、もう来なへてこつて言つたことじが」

「えつ、そりやあ、鬱陶しきから来るなつてことじが……

「本当にやう思つか?」

「えつ、違つか?」

「恐りくな。お前が出てつた後、彼女どんな様子だつた?」

僕は去り際に一度だけ振り返った。すると彼女は……。

「泣いてた……」

「なるほど。もしもお前のこと本当に鬱陶しいと思っていたとしたら、何で泣くんだ？清々した、ってなもんだろ？」

確かにそうかもしれない。少しくらいスッキリしていいものだ。でも……。

「じゃあ、何で泣いてたんだ？」

「きっと、彼女が行つたのは本心じゃねえ

「え？」

「思うて、あればお前の為を思つてのことだ。その前の無理してないかつていうのもな

「え、どうして？」

「わからんねえのか？考へてもみろ、お前のことが嫌いなら、もつと早い段階で追つ払つてる筈だ。それに、彼女はお前の名前を知つていた。何でだと思つ？」

「……同じクラスだつたから？」

剛はチツチツチツと指を振る。

「すぐに入院しちまつたんだろ？そんな娘がクラス全員の名前、覚えてねえよ」

「じゃあ、どうして

「まだわからんねえのか？ホンシット鈍いなあ……」

やれやれ、ヒドも言いたそうだ。

「向こうはね、お前のヒト、好きなんだよ

思わずドキン、とした。

「な、何言ってんだよ

「彼女、辛かつたんじゃないか？お前に無理をさせまこと、氣を遣つたこと。本当は、待つてるんじゃないか？」

「何を……」

「だから、お前が来てくれるのを

「で、でも……」

まだ泣つている僕を見て、剛は呆れ顔だ。

「じゃあ、お前はビーナの？..」

「え？」

「何で彼女の所によく行つてたわけ？彼女の言つまつ、同情なんか？」

「違つ……」

「違つ……」

「じゃあ、何でだ？」

「そ、それは……」

凜に聞かれた時もそうだった。同情じゃない、それは否定出来るのに、じやあ何故かと聞かれると答えられない。

「よく考えてみな。初めて会つた口のことからか」

初めて会つた口……。かわいいなと思った。それで、こんな娘が自殺するなんて駄目だ、助けたいと思って、止めようとした。

それは勘違いだつたけど、独りぼっちだと聞いて、何かしてやりたい、力になりたいって思った。

そして話してると楽しくて、こつしか会いに行きたくなつていた。それで、会わなくなつて、今僕は辛い。

「……」

「やつと気がついたかよ」

剛がニッコリ笑う。

「俺……凜の」と、好きなのか……

なんだ。そんな簡単なことだつたんだ。今まで会いに行つてたのは、同情とかそんなんじやない。ただ、僕が、好きな人に会いたかっただけなんだ。

「それがわかつたのなら、やることは一つだよな？」

そうだ。彼女に会いたい。会つて、自分の気持ちを伝えるんだ。もしかしたら、また突き放されて、辛い思いをするかもしれないけれど……。

とせ言え、やはりしばらへ振りなので、病院まで行くのに少し勇気が要つた。

「つたぐ、なんで俺まで……」

剛が不満を漏らす。

「いいじゃないか。頼むよ」

「でも俺、入口までだからな。先に帰るぜ」

「そうか……」

「ま、しつかりやれや。自信持つてな」

そう言つて剛は帰つて行つた。

凜の部屋の前まで來た。ドアの前に立つと、心臓が凄い勢いで高鳴つていく。もしまだ突き放されたら……。その思いがなかなかドア

をノックさせてくれない。

と、携帯のバイブが鳴る。病院では切らないといけないのを忘れていた。それには「コララー」と一言

（剛の奴……）

僕は少し笑った。何だか勇気が出て来た。そして思い切ってドアをノックする。「はーい」と声がする。これを聞くのも久し振りだ。

凜にしてみれば、看護婦さんが来たと思つたのだろう。僕を見ると、大層驚いた様子だった。

「ひ、久し振り……」

「うん……」

どこかわからない2人。そりやそうだ。会つのはあれ以来なのだから。

「いらっしゃる……」

「え?」

「いろいろ……考えた。俺、ここに来なくなつてから。それで、それを伝えに来た」

一つは自分のトラウマのこと。凜には話しておきたかった。それに、「私のせい」というへの弁明の意味もこめて。

凜は黙つて聞いている。

「それともう一つ」

僕は一つ深呼吸をする。

「何で、ここに来てたかっていつと……」

緊張しているのが、自分でも痛いほどわかる。凜は下を向いて、目を合わせない。

「同情で来てるのかって言われた時、何も言い返せなくて、そうだったのかなって、自分でも思つたりした。でも、あれから考えた。どうして来てたかって。半分くらい、剛、ああ、友達に教えられちゃつたけど」

僕は凜をまっすぐ見つめて続ける。

「俺さ、最初、君の力になりたい、君の為だ思つてた。でも、だんだん話してるうちに、俺の方が來たくなつて、会いたくなつて……。この3週間、なんかつまらなくてさ」

僕は立ち上がつた。

「俺……上手く言えないけど、君が……凜が……好きだ。好きなんだ。だから、会いに来たんだ」

しばしの沈黙。やがて、凜が口を開く。

「あの日……」

「ん？」

「初めて会った日、あの夕焼けの日、覚える？」

「ああ、俺が勘違いしたヤツ」

「あれね、実は勘違いじゃなかつたの」

「……え？」

「私ね、小学校、中学校とあんまり学校行けなくて、高校こそはつて思つてたのに、また長く入院しなきやいけなくなつて、もう凄く嫌になつてたの。だからあの時、本当に死んじゃおうつて思つた」

それは、とても衝撃的だつた。そんなことがあつたなんて。

「そこへキミが来てくれた。あつ、入学式の時に見た子だつて。まるで王子様が助けに来てくれたみたいだつた。だから、あの時本当にキミは助けてくれたの」

「そうだつたのか……」

「それから、キミが……悟君が会いに来てくれるようになつて、私、凄く嬉しくつて、それからは一番の楽しみになつた。それでどんどん好きになつて……でも、ある時思つたの

「凛は窓に手をやる。

「私のせいで、悟が無理してゐるんじゃないかつて。悟君はさ、優し

「からり、忙しいのに無理やり来ててくれて、他のことに支障をきたさないでほしい」

「凛……」

「それで悟君が嫌な思いをしたら嫌だつて思つて……。本当はずぐくすぐく会こたいのに、私、強がつちゃつた」

凛は田上つづりと涙を浮かべてこる。

「バカだよね……。自分で来ないでつて言つたのに、ずっと寂しくて泣いてばかりだつた。何あんなこと言つたんだつて、自分を責めたりした。でも、今、すぐ、嬉しいよ」

僕は思わず彼女に抱きついた。彼女は僕の胸に顔を当て、泣いた。

「うへ……、うへ」

「いのんな。寂しい思いさせて」

「うへへ、いいの。あらがう。あらがう……」

僕らはこの日、初めてわかり合えたのだと思う。止まっていた時間が、動き出したような気がした。素直になつてよかつた。勇気を出してよかつた。もづ、凛に寂しい思いはさせまい、やう心に誓つた。

空にま、ちゅうび一一番星が輝きだしていた。

「でも、やっぱ凄かったよ国立」

「やつの？」

「なんていつか、密席全体が真っ青なんだよね」

「へえ~」

「でも負けちやつて悔しいよなあ。俺があの時出でこれば……」

「もひとひかつただろ?」

「あ~、ひでえ。」

あれからどうも、僕らは前より仲良くなつた。何と云つか、お互いに云つたことを云つになつて、どんどん打ち解けていくところ。

そして、お互いに無理をしなくなつた。体調が悪い時は云つてもううつして、僕が忙しい時は無理矢理行くといつてがなくなつた。やべらいがけよひここんだなと、実感する。

ちなみに、期末テストは、見事に前回の借りを返すよひこい感じの成績だった。

「ん?」

カレンダーの7月7日の所に がそれである。七夕だからかな?

「ねえ、あのカレンダーの って……」

「え? ああ、あれね。何だと想ひ?」

「う~ん……七夕だから?」

「それもあるけど……もつ一つあるんだ」

「えつ、何々?」

「わからぬ?」

「う~ん……誕生日とか?」

凜は笑う。じつやう当たりだ。

「それでね、その日はこの近くの神社でお祭があるの。それでその日、もし体調が良かつたら、特別に行つてもいいよって言われたんだ」

「そうなんだ。それはさ、両親と行くの?」

「ううん、一緒に行こって言われたんだけど、他に行きたい人がいるからって断つちやつた」

「え、それって……」

僕は恐る恐る聞いてみた。凜は「ヤコトケル。

「悟郎、一緒に行ってくれる?」

僕はホッとした。他の誰かでなくてよかった。

「俺で良ければ?」

「やつたー誕生日パーティーだー。」

凜はまるで子供のように嬉しそう。

「おこおこ、あこまつまじゅうぐなつて。小学生みたいだぞ?」

「あつ、何よそれ」

「遊園地に行く子供みたいだ」

「うつとーれつかから子供扱いしてー」

「えへ?でも背なんかこんなじゅなにか」

僕は立つて、腰の辺りに手をかざす。

「やんなに低くないよー。」

顔を赤くして怒る凜。僕はケラケラと笑つた。七夕の祭、楽しみだなあ。

「あー」

僕は授業中だが、思わず声に出してしまった。

「ああ？」

「あ、いえ、何でもないんですけど。

「あ、いえ、何でもないんですけど。

その日は誕生日なんだから、何かプレゼントを渡そうと思ったのだ。
でも、こういうのは何を渡せば良いのだらう…

「プレゼントオ？」

僕は剛に聞いてみることとした。 いつこのことば、アイツはよく知
つてこりからだ。

「実は……」

僕は「」との経緯を話した。

「ほお～、それでプレゼントか。でもそんなの、お前が好きに選べ
ば良いんじゃないえ？ 好きな人からのプレゼントなんて、何だって嬉
しことと思うけどな

「いや、でもか、具体的にはどう……」

「せうだなあ……じゅあせ、アクセサリーとかにしたらいへネックレ
スとか」

「でも、それって高いんじゃ……」

「大丈夫だろ。安いのなら5000円ぐらいのもあるんだ」

5000円……。バイトをしておらず、小遣いを貯っている身としては少々辛いが、仕方あるまい。これも凜へのプレゼントの為だ。そして翌日土曜日。僕は近くのデパートへ来てみた。何か彼女に似合いそうなものはないだろうか。と、あるペンドントが目にに入った。

「これ……」

銀色で、真ん中に赤いのが埋め込まれている。特に他と比べてどうというか無かつたのだが、何だかそれに惹かれた。

そして、5000円をまるまる使って買った。よし、プレゼントは用意した。あとは、明日だ。

翌日。学校から10分ぐらい歩いた所にある神社。病院からも同じくらいで着く。夜の6時に神社の前に集合である。僕は10分ほど早く着いた。迎えに行つたら良さそうなものだが、彼女曰く、待ち合わせもデートの楽しみなんだとか。

もつとも、凜は来られるかどうか微妙なのが。というのは、体調が良ければ来られるのだが、もし悪ければ来ることは出来ない。その時はとりあえずプレゼントだけでも持つて行こう。そう決めていた。

ふと、視界が何かで覆われる。

「だ～れだ？」

「……凜？」

「あ～たり～」

「「コラ」と笑う凜がいる。

「体は平氣なの？」

「「うふ。でもね、2時間で帰らないといけないんだって」

「そっか。あんまり無理させられないもんな

と、凜が浴衣姿だったことに気付いた。思わず見とれてしまつ。

「どうしたの？」

不思議そ～に尋ねる凜。

「いや、その……か、かわいいよ……浴衣」

僕は照れつつも、何とか褒めることが出来た。が、凜はそれを聞くなり笑いだした。

「なつ、なんだよ、笑う「ことないだろ？」

「あはは、」めんなさい、ちょっとね、照れくさうつなのがかわいくて

「チヒーツ

「あ、『めんど』『めんど』、ありがとう」

「お、おお……」

改めてお礼を言わると濡れる。

「これね、お母さんのお下がりなんだ。今日来ててくれて、着せせて貰つたの」

「そうなんだ」

「ねつ、早く行こー。時間も限られてるんだし」

そう言って凜は後ろを気にしながら走つて行く。僕はそれについて行く。

お祭だけあって、色々な出店があった。金魚すくい、ヨーヨー釣り、ベビーカステラ……沢山見て回つた。凜ははしゃぎっぱなし。本当に病気なのか?と疑つてしまつた。でも、彼女の楽しそうな様子を見ると、じつちも嬉しくなつた。

「はあ、疲れた~」

「色々回つたからね。大丈夫?辛くない?」

「うん、平気。ありがとう」

僕らは石の階段に座つて空を見ていた。七夕にふさわしい、満天の

異様である。

「あれ……」

「本当に……珍しいな、こんなに見えたなんて」

それはもう本当にあれいで、例えるなら宝石箱の中身をひっくりかえしたよつて、カラカラと光っている。

（あれそろかな……）

「凜」

「うん?」

「今日せめて、プレゼントがあるんだ」

「え、なあに?」

「「」れなんだけど」

「ありがと。開けてみていい?」

「いいよ」

凜は包みを開ける。そしてペンダントを見ると、パラッと明るい顔をした。

「わあ……」

“いらっしゃり喜んでくれたようで、胸をなで下ろす。

「嬉しいな、ありがとうー。」

凜は早速つける。

「うへ、似合ひうへ。」

「ああ、似合ひうへよ。」

「これ、一生の宝物にするね。」

「そんな大げさだよ。」

「そんなことないよ。だつてせつかく悟君が買つてくれたんだもの。」

「うと彼女は笑つた。」

「実は、私もキミにプレゼントがあるんだ。」

意外な言葉だつた。

「えつ、何々？」

「これ……」

見るとミサンガだつた。切れたる願いが叶つといつアレである。

「え、これ、作ったの？」

「うん。コツソリ作ってたんだ。看護婦さんがいい人で、作り方教えてくれて」

僕は凄く嬉しかった。今まで女の子に何かを貰つたことなんて無かつた。それだけに喜びもひとしおだ。

「ありがとう。大切にするよ」

「よかつた。喜んでもらえて」

そしてまた星を見上げる。本当にきれいだ。ふと凜を見ると、凜もこっちを見ていて、目が合つて微笑む。そして、自然と手をつないだ。

凜の手は少し冷たかった。手の冷たい女の人は、心が温かいと聞いたことがあるが、凜もきっとそうだ。

「悟君、手、あつたかいね」

「そ、そう?」

「もう少し、そっち行つてもいい?」

「ああ、いいよ」

そう言つと凜は真横に来て僕の肩にもたれかかってきた。僕は動揺を隠せない。が、凜はそのうちにすぐ寝てしまった。

「寝ちゃったか……」

なんだかホッとする。僕は夜空に向かって祈った。神様、どうかこの娘の病気が治りますように。その為なり、僕は何だつてします。だから彼女の病気を治してやつて下さること。

「ありがとう……」

凜が呟く。ビルやアパートの間、さうと楽しに夢を見ているのだろう。幸せそうに笑みを浮かべている。もう少しで帰らなければいけなかつたが、もうしばらくの間、このままでいたいなと思った。

夏休みはあつとこづ間に過ぎていった。部活も合宿があつたりして、少し速くなつたんじやないかと思う。今年の夏休みはいつもより早い。

でもそれは、やつぱり凜のおかげなんだとと思う。夏休みも部活の終わりにちょくちょく通つていた。

その日も例によつて凜のもとへ行き、談笑に華を咲かせていた。

「せつせつ、だから俺、断るわけにもいかなくて……」

「へえ~」

と、凜がケホケホ、と2つ咳をした。

「大丈夫?」

「うん、平氣だよ」

そつは言つものの、何だかボーッとしている。

「本当に大丈夫? 何かボーッとしてるよ?」

「う~ん……そつね、ちょっとだけ疲れてるかも」

「そつか。じやあ今日は帰るよ」

「「」あんね。せっかく来てくれたの」

「何言つてんだよ。ゆつくり休みなね？また来るからわ」

「「」さ、ありがと」

「それじゃあね」

「「」と、さよなら……」

凜の部屋を出て、病院の入口まで来た。ふと、凜の部屋のある方を見上げる。

（……。）

何だらう。胸騒ぎがする。とても嫌な胸騒ぎが。このまま帰つていんだらうか。何だか、このまま帰つたら、もう二度と会えなくなつてしまつ気がする。

僕は一旦凜の部屋の前まで戻つて来た。と、中から咳が聞こえる。そこまで大きいものではなかつた。しかし、次の瞬間、

「ツ……！——ゲホッ、ゲホッ！——」

（……）

突然それがとても苦しそうなものに変わつた。僕はたまらず中に入る。

「凜！——」

ふと床を見ると、赤いものが2つ3つ……。

（血を吐いたのか？）

ドスン！…突然大きな音がしたかと思つと、凜がベッドから転げ落ちていた。そしてそのまま動かない。

「凜！…」

僕は凜を抱き抱える。しかし反応がない。

（嫌だ……）

「凜！…しつかりしろ、凜！…」

しかし動かない。

（嫌だ……！…）

「凜！…おい、凜！…」

僕は我を忘れ、ただただ呼び掛けことしか出来ない。

（嫌だ！…！…）

僕はよつやく、側にあつたボタンに目が行つた。

（ナースコール……）

僕は夢中でそれを押し続けた。程なく看護婦さんが駆け付けて、先

生を呼んでくれ、そのまま凜は手術室へと運ばれていった。

「カチッ」

「手術中」のランプが赤く光る。僕はその前のベンチに座りただ祈り続けた。

（べつしう……）

例えよの無い不安が襲つて来る。もし、凜が助からなかつたら……。このまま会えなかつたら……。弱気になつてしまつ。

嫌、これじゃ駄目だ。神様、どうか彼女を助けて下さい。まだ死なせないで下さい。助けてくれたら、僕は何だつてします。本當です。一生のお願いです。どうか、彼女を助けてやって下さい。

「悟つ……」

剛が大慌てでやつて來た。

「剛……」

「凜ちゃんは？」

僕は「手術中」の字に目をやる。

「そうか……」

僕はまた下を向いた。すると剛が僕の肩を叩く。

「大丈夫だ。あの娘は助かる。きっと助かる。あんないい娘が死ぬわけねえ」

「剛……」

「お前のことを好きになってくれるような奴なんてな、よっぽどのいい娘に決まつてんだよ！」

剛はニッと笑う。それを見て泣きそうになる。

「なんだよー元気だせ！大丈夫だから、な？」

「うん……」

ふと、向こうの方からバタバタと2人走つて来る。40歳ぐらいだろうか。

「凜！－！」

そう叫んで、僕らの前に来た。

「悟君……だね？」

「そうですけど……」

「私は……高木圭一。凜の父です」

背は180センチぐらいだろうか。見るからにして優しそうだ。側にいるお母さんも優しそうだ。やはり、この親あってあの子ありだ。

「凜から話は聞いてるよ。よく凜の話しが相手になってくれるそうだね。本当は私達も、毎日でも行きたいところなんだが、仕事に追われてそういうわけにいかなくて。だから、君には感謝しているよ」

「そんなこと……」

「まあ、今はそんなこと言ひてる場合じゃないか……」

「両親は2人ともとても心配そうだ。お母さんは泣いてしまっている。そりゃそうだ。実の娘が生死の境をわざよつていいのだから。」

時間が過ぎていく。もう1-2時を回っていた。

「ブツン」

手術中のランプが消えた。その場に緊張が走る。鼓動が急に速くなつた。

みんなが固唾を飲む中、先生が出て来る。

「先生！…娘は……凜はどうなんですか！…？」

お父さんが大声で言ひ。

すると先生は、それまでしていた厳しい表情をフッと解いて言つた。

「大丈夫。一命は取り留めました。手術は成功です」

「本当ですか！…？」

僕は立ち上がった。思つた以上の大声が出て、ひょっと恥ずかしくなつた。

「ええ。ただ、しばらくは安静にしていないと……」

「やうですか」

「やつたじやないか悟!—助かつたつてよ!—」

「うん……うん……」

僕はその場にへたりこんでしまつた。何だか力が抜けた。

「それじゃあ歸さん、今日はもう遅いのでお帰り下さこ」

看護婦さん達が帰るよつに促す。仕方なくみんな帰る。が、どうしても帰りたくない、と思つた。側にいたい。どうしても。

「あのつー。」

僕は振り返つて叫んだ。

「何ですか?」

「その……彼女の側に居ては駄目ですか?」

「いや、でも……」

「その……あんなことになつて、起きた時に誰も側にいなかつたら、とても不安になると思つんです。お願ひです、彼女が起きるまでで

いいんですー側にいたせめて下せー!」

僕は先生に懇願する。必死に頭を下げた。

「俺からもお願ひしますー!」イツを側にこねせてやつして下せー!」

剛も一緒になつて頼んでくれる。先生達は困惑している。まあそうだろう。無理は承知のうえだ。

「私からもお願ひします」

と、お父さんも頭を下げていた。

「おじやん……」

「わいと娘も、君がいる方が嬉しからうからね」

「シと笑う。先生達は少し考える。そして、

「わかりました。いいでしょ。ただし君だけ。それと、起きたらすぐに帰ること。いいね?」

「先生……ー」

そして僕は、寝ている凜の側にずっと座っていた。凜はまだ意識が戻らない。眠っているかのようだ。こうしていると、色々考えてしまう。

(凜……)

手術は成功したらしへけど、もし二のまま意識が戻らなかつたら、もし凜がいなくなつたらどうしたらいいのか、仮に意識が戻つたとしても、また同じよひつなことがおきないだろつか……。どんどん不安になる。

すると突然、凜がゆつくりと動いた。意識が戻つたのだ。

「凜……！」

「悟……君？」

「凜……！」

凜の声を聞いた途端、わざきまで考えていたことは全てどこかへ行つてしまつた。凜が生きている、今はそれがただ嬉しかつた。とめど泣く涙が溢れてくる。

「どうして……そんなに泣いてるの？」

「だつて……だつてよ……」

涙でぐじやぐじやになつて、言葉にならない。よかつた。本当によかつた。

「悟……」

凜は体を起しき。

「あのね、ずっと夢を見ていたの」

「夢？」

「うん。階段が田の前にあって、それを登らなきゃいけないって気がして。どんどん登つていってたの。そしたらね、キミがまだ行つちゃダメだ！って、私を連れ戻してくれたの。多分、あのまま登つてたら私、死んじゃってたんだと思つ。また、助けられたやつたね」

凜は笑う。それを見て、また涙が溢れてくれた。

「よかつた……本当によかつた……」

「悟穂……ありがと」

凜も泣いていた。2人して、ずっと泣いた。ただただ嬉しくて。

しかし、やはり凜の容態は、予断を許さない所まで来ていたのだった……。

第8章『決意』

後からわかったことだが、あの時凜は、とても危ない状態だったらしい。あと少し気付くのが遅ければ、助からなかつたかもしれない」と、看護婦さんに言われた。

つまり、もしもあの時凜の所に戻つていなかつたら、本当に一度と会えない所だつたかもしれないということだ。そんなこと、考えただけでもゾッとする。

しかし、どうやら事態はそれだけでは終わらなかつた。

「何だつて？」

僕は今凜が言つたことに耳を疑つ。

「昨日ね、先生から言られたの。この間みた的な発作がいつまた起つるかわからない。もう手術しなきゃダメだつて」

「手術……」

「先生が言つにはね、これに成功すれば、病気ははるりとこの

「や、それじゃあー

「でもね、失敗したら、そのまま死んじゃうだらうつて……」

「そんな……」

「治る」と聞いて歓喜したのも束の間、そこまでの病気を彼女が抱えていることを、改めて思い知らされる。

凜は下を向いてしまっている。僕は、何とか元気づけようとする。

「で、でも、成功したら治るんだろ?」

わざとらしく明るい口調で言つた。しかしそれは効果がなかつた。「でも……」

凜は下を向いて黙つた。

「私……手術受けたくない……」

「え?」

「だつて、手術して、失敗したらもう死んじゃうんでしょ? でも、しなかつたら失敗した時よりは長く生きられるし……」

「で、でもさ、成功したらずっと生きていられるし……」

「怖いの……」

凜は微かに震えていた。

「だつて死んじゃつたら、悟君や、お父さんお母さん、色々な人達と、もう会えなくなるでしょう? 私、昔は死んじゃおうつて思つたこともあつたけど、悟君が来ててくれて、何だか幸せだなつて感じて。この間の時、私、もつと生きたいつて思つた」

「だつたら……」

「でもだめ！」

「だつて、失敗したら、本当に、会えなくなつかけり。悟君といつして話したりも出来なくなる。そりゃ成功したら治るのかも知れないけど、失敗して今を失うのは怖い。怖いよう！」

凜はしがみついてくる。その手はびりしそうもないくらい、震えていた。

僕は神様を恨んだ。ああ、びりじてこんな、17歳の女の子にこんな試練を『えるのだわ』。代われるものならいへりでも代わってやりたい。

「死」への恐怖とは、一体どんなだらう。人間誰しもいつかは死ぬ。しかし、今まさに死ぬかもしれないという恐怖は、きっと想像もつかないぐらいだらう。

まして17歳の女の子だ。怖いに決まつてこる。恐怖に怯える凜を前に、僕は何も言えなかつた。

「はあ……」

昼休み。ため息をついてしまつ。凜があんなに苦しんでいるのに何も出来ない自分。のうのうと学校に来ている自分。それが歯がゆくて、悔しかつた。

不意にポン、と頭を叩かれる。

「どうしたんだよ剛。ため息なんついて。凜ちゃん無事だった
じゃんかー」

剛はまだ知らないようだ。僕は凜の置かれていく状況を話した。

剛は言葉を失っている。が、やつとの想いで口を開く。

「それでため息ばっかついてんのか?」

「それもある。でも……」

「でも?」

「……なんて言つか、自分がすぐ歯がゆくなれ。凜があんなに苦
しんでるのこ、俺、何もしてやれない。」

自分という存在は、大切な人が苦しんでいる時に助けてもやれない
のか。いかにちっぽけな存在なのかを思い知らされる。本当に参め
だ。

凜が抱える不安や恐怖を考えると、こいつも立つてもこられなーいのこ
……。

「ま、まあ、元気だせよ。そんなに自分を責めるな。お前まで暗く
なつてると、凜ちゃんだつてもつと不安になるだろ?」

「剛……」

「それに、助けることは出来なくても、勇気づけることは出来るだ

「うー。」

「でも、どうやって？」

「そ、それは……」

と、ポケットの中の携帯がブルブル震える。

「メールか？」

「ああ」

何だろうか。見てみるとキャプテン、まあ新キャプテンになつた同級生の奴からだつた。

『今日の練習後に、新人戦の出場種目を決めるので、各自考えといて下さい！』

「新人戦？」

「ああ、今度試合があるんだ」

「それって例のアイツも出んの？」

「ああ、出るんじや……」

僕はその時ピンと來た。

「それだ！！」

「わっ、こきなり大声出すなよ！」

「俺、わかったよ！彼女の為に、俺が出来ること……」

「そ、そりかよ」

新人戦は県大会だ。つまりアイツ 高見総一郎も出て来る。もし僕がアイツに勝てたら、きっと彼女を勇気づけることが出来る筈だ。そりやあ、例のトラウマもある。一筋縄ではないだろう。だがこれはきっと、神様からの試練なんだ。

七夕の夜、僕は神様に、何でもするから彼女の病気を治して欲しいと願った。

僕は今、試されているのかもしない。本当に彼女のことと想うのなら、乗り越えて見せろ、と。

彼女に伝えに行かなきや。直ぐにでも会つて伝えたい。

「剛、俺、次サボるから適当に言つとこてくれ……！」

「えつ、お、おい……！」

僕は病院へ走った。そして大慌てで凜の部屋へ。

「凜……！」

興奮のあまり扉をバン！と開けてしまった。凜は驚いている。

「ど、どうしたの？ そんなに慌てて」

「話が、あるんだ」

「え？」

僕は呼吸を落ち着かせて続けた。

「あのや、手術……受けてくれないか？」

「え……」

凜は黙つてしまつ。おじさん曰く、自分達や先生の再三の説得にも、首を縦に振りながらうなづいたそうだ。

「やつぱり……怖い？」

凜は「クッ、と頷く。

「じゃあ、ちよつと賭けをしないか？」

「賭け？」

「ああ、単純なね。あのね……」

一つ間をおこして言つ。

「今度、新人戦つて言つて、1・2年生だけの県大会がある。そしてそれに高見総一郎も出る

「……」

「それでもし、俺が高見に勝つたら、手術を受ける。もし負けたら、凜の好きにしたらい。どうかな?」

「え、それって……!」

「つまり、俺が例のトラウマを乗り越えられたらい！」

凜は慌てだす。

「でも、前はダメだつたんでしょう? それに、高見つて人、とっても速いんじゃ」

「それは……そうだけど」

「それにそんな、私なんかの為にそこまで辛こ思こする」になじよ
!無理しないで……」

「凜……！」

僕は凜の両の肩をガシッと掴む。

「俺な、今凄く辛い。何でかわかる? 腹が苦しんでるのも向も出来
ないからさ」

「悟君……」

「俺には、病気を治してやることも、代わりになつてやることも出来ない。走ることしか出来ない。ならせめて、それで腹に熱氣をあ

げたい」「

僕は凜の田をまっすぐ見つめる。

「そりゃあ俺だって怖い。震えるくらい。でもさ、俺が乗り越えられたら、凜だって乗り越えられる。だからさ、俺を信じてくれないか?」「

「悟君……」

「俺は絶対乗り越える。そして凜も絶対治る。な?」

僕は精一杯の笑顔で彼女に言った。震えるくらい怖いけど、凜の辛さを考えたら、このぐらじびつてことない。待つてろ、凜。直ぐに勇気を届けに行くよ。

第9章『overcome』（前編）

その日から、僕の猛練習が始まった。こんな言い方をすると、今まで練習をやっていなかつたようだが、そうではなくて、今まで以上に、といつことだ。

朝、学校へ行く前に走り、昼休みにも走り、部活でも走った。さすがに練習後はバテバテで、凜の所へは行けないでいたが、窓からたまに見える。手を振ると向こうも手を振ってくれる。

そして、練習のかいがあつて、僕は地区予選を突破し、県大会へ進出を決めた。これで1歩、凜の手術に近付いた。

「予選、突破したんだ。次はいよいよ県大会さ」

「うん、でも……」

凜は心配そうである。

「あのさ、最近特に根詰めて頑張つてるけど、大丈夫？」

「ああ、それなら平気！ちゃんと休んでる時は休んでるから。マッサージとかもしてるしね」

実は親の知り合いに、腕のいいマッサージ師がいて、特別にタダでしてもらっている。おかげで体は軽くなる。やつてる時は凄く痛いのだが。

「そう？ぐれぐれも、無茶はしないでね

優しい娘だ。自分が死んでしまうかもしれないのに、僕を気遣ってくれる。やつぱりまだ死なせるわけにはいかない。改めて闘志を燃やした。

翌日、部活の時間。キャプテンに呼び止められる。

「おい、悟。県大会のスタートリストが来てるから、田え通しつけよ?」

そう言われ、走る時間をチェックする。午後2時からだ。

「昼からか……」

次に、走順に目をやる。沢山の名前がある中で、僕は見つけた。見つてしまつた。あの名前を……。

「高見・総一郎……」

「コイツに勝たなければいけないのだ。改めて名前を見ると、少し決意が揺らぐ気がするが、そんなこと言つてられない。」

（やるしかない）

僕は揺らぎかけた決意を固める。試合は、もうあわてとつ所まで来ていた。

そして試合前日。軽い調整だけで済ませ、凜のもとへ。前日というの、あまり走りすぎると、疲労を残してしまつ。ここまできると、

今までやつてきたことを信じるしかない。

「こよいよ明日か……」

「そうだね」

「俺のことは、ちゃんと応援してくれよ?」

「……」

凜は浮かない顔。

「悟君、本当に大丈夫?」

「へ?」

「その……もし、明日走って……負けちゃって……走るのが、嫌いになつたりしないかって……」

凜はポシリポシリと続ける。

「本当に、私のせいで、無理をさせてしまふんなさい……」

いつも増して弱気な凜。僕のことを本当に心配してくれてるんだ。何だか嬉しくなる。が、僕は凜のおでこをピン、と弾く。

「いたあ……」

「何言つてんだよー今からそんな弱気でー何?俺に負けてほしいの?」

「?」

「や、そんなこと……」

「じゃあちゃんと応援するー。」

「へ、うん……」

「じゃあ、頑張れって言つて」

「え？」

「明日頑張れるように、笑つて頑張れって言つてー。」

凜は少しして、無理矢理笑顔をつくる。そして言つた。

「が、頑張つてね」

「お、頑張るよーこれで優勝しちゃうかもなー。」

「……ばか」

凜は泣きそうになつてゐる。本当はね、空元気なんだよね。今俺、すげえ怖い。じつとしてると、震えがきそうなくらい。

正直言つと、今にも逃げ出しちまい。明日だつて思つといつもたつてもいられない。

でもね、君があんまり優しいから、心配してくれるから、頑張ろつて思うんだよ。

そんなに優しい君が、いなくなつてしまつなんて、俺、絶対に嫌だ。だからそれを思つとせ、乗り越えられそうな気がするんだ。

だから見ててくれよ。俺、頑張るからさ。

翌日、9月22日、快晴。気温はやや高め、しかし風が吹いているせいか、それほど暑くはない。

いよいよ運命の日を迎えた。もつ少し気負つてゐるかと思つたが、不思議なくらい落ち着いていた。

アップをする。そしてスタンドに手をやる。凜の姿はない。まあ入院しているのだから、仕方ないといえは仕方ない。

それはいいとして、腑に落ちないのは剛だ。明日来てくれと言つたら、

「あ、悪い。明日アートなんだよね！」

だ。つたぐ、こんな日ぐらい応援に来いつつ。まあ、アイツらしこと言えばらしこだ。

そんなことを考へられる自分に、少し余裕を感じた。

アップを済ませ、スタンドに戻ろうとした。と、よそ見していたせいで、ドンーと前から来た人とぶつかつて転んだ。

「す、すいません」

謝つて顔を上げる。その人は見たことあるよつた金髪だった。

「高見……」

金髪で長身。刺すような鋭い目つき。威圧するような見つめを見ている。

「ん? 何だお前?俺のこと知ってるの?」

高見は、まるで覚えていないうつた言ひ方だった。

「高見ー!」

遠くの方で、奴を呼ぶ声が聞こえる。

「ねつーじや、氣をつかうよな」

その声の方へ去つて行つた。

(高見……)

いざ対峙すると、氣があされてしまいそうになる。でも、僕はもう後には引けないんだ。やるしか、な。

僕は、勝つんだ。アイツに、トライマ。凛のために。

そして1時50分。招集場所には沢山のランナーが集結した。僕もそこに並んでいる。

スタート位置に着くよつこと指示される。僕は周りを見回して、高見を探した。

(いたー！)

僕は高見の真横へ行つた。

「おつ、なんだ。お前も5000だったのかよ

「高見……

僕は思い切つて言つた。

「俺は今日、お前に勝つ」

「はあ？」

高見は何言つてんだコイツ、と言わんばかりの目で見ている。

「おもしれえ。ビートのドイツかは知らねえけど、やれるもんならやつてみる」

やはり高見は覚えてないらしい。そしてスタートの刻を迎える。心臓は高鳴っているが、何となくそれが心地よい。

「三一イ……

パンー！

第9章『overcome』（後編）

レースがスタート。全員がダンゴ状態でひしめく。と、高見がいきなり前に出て、後ろの集団を引き離していく。

僕は、今はここにいて、後半に勝負をかけようと思った。が、

（ダメだ！！）

直感的に、そんな悠長なことを言っている場合ではないと判断した。ヤツのペースに付いて行かないトマズイ。

僕は必死に高見にくらいくらいしていく。1000m、2000mと過ぎる。僕は少し息があがっていたが、何とかついていっていた。

これならいけるかもしれない。そんなことを想いだす。

「くそっ、しつけんな！」

走りながら高見が叫ぶ。

「俺は今日、お前に勝つんだ！」

僕も言い返す。

「何なんだおま……！」

高見が言いかけて止める。そしてニヤッとした。

「思ひ出したよ」

それまで少し前を走っていたのを、僕の真横へつけて呟く。

「中学の時いたよ。お前みてえな鬱陶しいヤツ。ソイツは後半バテて、ビリッケツだったけどな。お前だったのか」

ドキン、嫌な胸騒ぎがする。

「それで何？涙の再挑戦ってか？へっ、下らねえ」

高見はさらに揺さぶりをかけてくる。そして残念ながらそれは僕には効果は抜群だった。みるみる動搖していく。

「お前みてえに才能ない奴、頑張つたってしょうがねえんだよ」

ズキン、胸が痛くなる。またしても、奴から同じ台詞を吐かれるとは。奴は揺さぶりをかけようと言つたのだろうが、僕にはとても堪えるものだった。しかし、

「つるさーー！」

僕は高見に向かって叫んだ。あの頃とは違う。背負つものだつてあるんだ。そんなことにぐらつこてられない。

高見はチツ、と舌打ちをする。

「なじ本気だしてやるよーー！」

そう言つて高見はグン、とペースを上げる。僕も必死に付いて行く。

しかし、だんだんと差が開いていく。

「ぐつ……」

周を追いついて、ジリジリと開く。せつときまでは気にならなかつたが、開いてくると、疲労一気に襲つてくれる。苦しい。

（ダメか……）

もうラスト2周だ。差は50mはあらうかといつぐらいたつた。僕は失速していき、後続にも追い抜かれる。そしてどんどん弱気になつてしまつ。

くそつ、偉そなこと言つて、結局俺なんてこんなもんか。あんなに練習したけど、やつぱダメか。やつぱり俺みたいな奴、頑張つたつてしようがないのかな。

もう疲労でどうしようもなくて、やつと走つていた。直ぐにでも止めてしまいたくなる。ふと浮かぶのは凜の顔

凜……「めんな。俺、あんなこと言つて、結局君を助けられなかつたよ。本当に、じめんな……。

と、ドスンーと足がもつれてその場に転倒する。

なんとか起き上がるつとした時、左手のミサンガが目にに入った。

（ミサンガ……）

凜との思い出が甦つて来る。初めて会つた日。僕は彼女が自殺する

んじやないかと飛び込んだ。

そして彼女のピアノ。本当に感動してしまった。

喧嘩した日。やり場のない怒りに苛まれた。

仲直りした日、素直になれて、分かり合えた気がした。

そして凜が倒れた日。助かって、まだ彼女が生きていることに涙が止まらなかつた。

僕は立ち上がる。そして、まっすぐ前を見据えた。このまま終わるわけには行かない！！

「まだだあ！！」

僕は息を吹き返したように猛然と追いかけだした。確かに俺みたいな奴が頑張った所で、しょうがないのかもしれない。

でも、俺はまだ諦めたくない。凜は、まだ生きるんだ。俺は諦めない。彼女の背中を押してやるんだ。そして、俺も乗り越えるんだ。

僕はドンドンと、さつき抜かれた奴をバスしていく。高見との差もグングン詰まっていく。高見が心なしかペースが鈍つてきている。これはチャンスだ。

そして僕は、ラスト1周の手前、ついに高見をとらえた。

「チツ、しつこいんだよてめえ！！いい加減にくたばりやがれ！！」

「俺は……お前に絶対に負けるわけにいかない。凜は、こんなのは比べ物にならないくらい頑張つてんだ。だから俺がこんな所でくじけるわけにはいかない！俺が勝つんだ！！」

「つ、何を訳わかんねえ」と言つて……」

僕はさらにスパートをかける。体はもう、半分くらい言つことをきいてくれないが、気持ちでなんとか足を前へ、前へやる。

高見もさすがなもので、トップを死守している。そしてついにラストト一周を告げる鐘が鳴り響く。

ラスト1周。2人のデッドヒートはなおも続いている。僕はもちらん、高見も必死である。

僕は走りながら、ここまで本気で頑張っている自分に驚いていた。そりやあもちろん、頑張るつもりではいた。けれど、心のどこかで頑張ることを恐れていた。

本気で頑張つて、また傷つくるのが怖かった。でも、頑張るつてことは、本気で頑張るつてことは、思っていたより痛いものではないらしい。

「フフフ……」

体の底から、笑いが込み上げてくる。最初のうちは、本当に凜のためにとだけ思っていた。しかし、高見と走っているうち、忘れていた何かを思い出した。

僕はやつぱり、走るのが好きなんだ。凜が気付かてくれた。なんだ、凜を助けるなんて偉そうなこと言つて、結局自分が助けられるじゃないか。

凜。ありがとう、俺、君のおかげでやつとわかつたよ。だから……。

「お前も……頑張れええええ……！」

あとはラストの直線だけだ。最後の力を振り絞つて走る。

高見も負けじと食い下がる。

『今両者ファニッシュショーナー！こればどっちだー？際どいぞー！？』

実況の興奮気味のアナウンスで、ゴールしたのを知った。2人とも倒れこんでいた。僕はやつとの思いで起き上がり、電光掲示板に目をやる。そして、その一番上、つまり、1着は……

『アイダサトル』

『優勝は会田悟君！激闘を制しました！』

勝つた？俺が勝つたのか？まだ状況が飲み込めない。と、高見がこちへ来る。そして、手を差し伸べた。

「やるじゃんお前。俺の負けだよ。お前みたいな奴、初めてだ。あの時は、あんなことあんのかい言つて悪かつたな」

意外だった。高見が謝るなんて。僕は少し笑つて言った。

「何のことだ？俺は忘れたよ」

「お前……」

高見は何だか穏やかな顔をしている。

「次は絶対倒してやつたからな。怪我とかすんじゃねえぞ」

「お前もな

後ろを向き、じゃあなと言わんばかりに手を高く上げて、高見は去つて行つた。

新人戦が終わつた。僕はしばらくスタンドでボーッとしていた。

（俺……勝つたんだ……）

正直、まだあまり実感が沸いてこない。レース前は確かに、凜のために絶対勝とうと思っていた。

（確かにずっと凜のことを考えていた。でも、それだけじゃなくて……）

あの時、「楽しい」と思った。「こと、本当に久し振りだつた。それに気付くことが出来たのは……。

（帰るか……）

競技場の入口を出る。と、匂いから声がある。

「悟……」

剛だ。今来たのかよ。遅えりつひの。

「なんだよ今来たのか？」

僕はちよつと怒つたよつて。ひ。

「そつ言つなつてー。ゲストもいるんだからー。」

「ゲスト？」

「あつち見てみろよ」

剛は右の方を指差す。僕もそつちを見る。そして驚いた。

「凜……」

なんとそこには凜がいた。

「へへへ、無理言つて連れて来ちやつた」

鼻をさすりながら剛が言つ。

「じゃ、俺帰つからや、ちやんと送つてやれよ?」

剛は帰つて行つた。競技場の前で見つめ合つ二人。

「俺や、勝つたよ」

僕は口を開く。

「ホントビックリだよ。凜のために走った以為て走ったやつを、勝てちゃつたよ」

「語呂……」

「それと……や」

「何?」

「……あつがとうな」

凜はその意味をよく把握出来ていない様子だ。

「え? どうして?」

「あのや、俺、走つてて、最後とかさ、すっげえ楽しかった。例のトライカーデ、走つてて樂しつつ心から思えたことなんてなかつた。でさ、今回は、凜のために絶対勝つって思つて走つた。そしたらさ、本気の本気で頑張れた。そしたらさ、楽しかったんだ」

最初に高見が飛び出した時、ついて行くか正直迷つた。でも、勇気を出して行けたのは、凜のためにといつ思いからだ。だから……。

「だからさ、あの時勇気を出せたのも、走るの樂しつて思えたのも、乗り越えられたのも、君のおかげ。だから、ありがとう」

「悟君……」

「凜もさ、俺、頑張ったからさ、手術頑張れよ。大丈夫、俺がついてる。それに、辛いことの後には、楽しいことが待ってるんだぜ?」

「悟君……」

凜は僕に飛びついてきた。そして、えーんえーんと、まるで子供のようつに泣き出す。

「あ、おーおい、泣くなよ~」

「だつて……だつて……」

凜はさういって、ギュッと僕を抱きしめる。

「私……頑張るね。キリにもらった勇気で、私、頑張るから……」

「凜……」

凜はいつまでも泣いていた。大丈夫、きっとつまむいく。俺、乗り越えられたから。だから、頑張れよ。

大丈夫。神様はきっと、君を助けてくれるよ。いつかの願いを叶えてくれるはずだよ。なあ、そだる?

最終章　『旅立ち』

数日後、凜の手術が行われた。いつの間にか、凜のことは、病院中の患者の知るところとなつており、その日は文字通りみんなが固唾を飲んで見守つている。

手術は何時間にも及んだ。僕はただただ成功を祈つていた。

そして、先生が出て来てニコニコと笑うと、病院は歓喜につつまれた。

おじさんとおばさんは抱き合つて喜び、僕も剛と抱き合つていた。

そして大粒の涙がこぼれた。見ると、みんな泣いていた。辺りが、優しい涙で溢れていた。

その後凜は、みんなの見守る中で目を覚ました。おばさんは泣いて抱き付き、凜も泣いて、僕も泣いた。と、凜が僕に向かつてピースをしていた。

「やつたよ！」

彼女の笑顔がそう言つてゐるよつて思えて、僕もピースで答えた。

さらに数日後、退院の日。凜は先生、看護婦さん、それに他の患者の人達に拍手をおくられ、照れくさそうだった。

と、凜がおばさんの方を向いて、

「ねえお父さん、お母さん、ちょっと、最後に見てきたいものがあ

るんだけど、いい?」「

「え、なあに?」

「内緒~」

「あらあら。いいわ。でも、あんまり遅くなつたらダメよ~。」

「うん、わかつた」

そう言つと凛はこつちを向いた。

「悟君、行こ?」

僕は彼女の行きたい所がすぐにわかつた。そう、2人が出会つた、あの屋上。

「うわあ……」

「きれい……」

そこにはあの日と同じ、きれいな夕焼けが広がつていた。僕らはベンチに腰掛ける。あの時はちよつと空けたが、今は隣だ。

「いひいひ……あつたよね」

凛が感慨深げに言つ。

「本当?……」

マヌケな出会いから、通つよくなり、元気づけれたり、喧嘩したり、仲直りしたり……。お祭にも行つたなあ。

「今まで……ありがとうね」

「な、なんだよ。改まつて」

「なんかね、言つておきたかったんだ。ありがとうね」

「そ、そんな……。俺の方こそ……」

と、凜が僕の前に立つ。

「あのね、私……ピーロッパに留学するんだ」

「え、そうなの?..」

「うふ。お父さんがね、お前は今まで頑張ってきたんだから、これからはお前の好きにしていいぞつて。それでピアノの勉強をしたいつて言つたの。そしたら、知り合にがウイーンにいて、家を紹介してくれるから、そこにみんなで住もうって

「やうだつたのか……」

「それでね、向こうの音楽の学校に転校するの。私もね、本場でそういう勉強がしてみたいって思つて。ピアニスト、本當になりたいから

「やつか

僕も立ち上がる。そして、叫んだ。

「頑張つてこなよ」

「悟君……私のわがまま、許してくれるので?」

「許すも何も、凜が自分で選んだ道じゃないか。俺はそれを応援したい」

「悟君……」

「それに、凜のピアノ、本当に凄いから、絶対いいピアニストになれるよ。そりゃあ、会えなくなるのは寂しいけど、手紙とか書くからね。だから……大丈夫だよ」

「本当言うと、行つて欲しくなかつた。だけど僕は気丈に振る舞う。だって、凜が夢に向かって歩き出すとしてるんだ。止めることがなくて、出来やしない。」

「それ……や。こつか、迎えに行くから

それを聞くと、凜はまた僕に抱き付いてきた。

「あつがとつ……あらがとうね……」

「うひ、おこおこ、また泣いてるのかよ。ホント、よく泣くよなあ

「だって、いつもキミが泣かすんじゃなー」

そう言つ凜は、泣きながらも嬉しそうだった。

「大好きだよ……」

「俺だつて……」

そんな2人を、夕日がいつまでも照らしていた。

そして凜が旅立つ日。僕は剛と空港へ見送りに来ていた。

「凜ちゃん、向こう行つても頑張れよー応援してるぜ?」

「うん、ありがとう剛君」

凜はとても幸せそうに見えた。

「凜……」

「ん? なあに?」

「その……辛かつたら、いつでも俺に言えよ~そつちまで、すぐこ
行くから」

「フフフ、ありがとう。それじゃあ私もいいくね?お父さんとお母
さん、待ってるから」

「ん……気をつけてな」

向こうを向いて歩き出す凜。と、いつちへ戻つて来て、

「ね、ちよつと皿を頸つて?」

「え、何？」

「いこから

何だろ？と思いつつ目を閉じる。と、何かが右のほうへたにあたった。少しおじて、それが凜の唇だとわかった。途端に顔が真っ赤になってしまう。

「悟君、約束通り、いつか迎えに来てね！じゃあ……行って来ます！――」

ビッシュ、と一いちへ満面の笑みで敬礼をして、走り去つて行く。そして凜はウイーンへと旅立つて行つた。

「行つちまつたな……」

「ああ……」

と、剛が僕の手に巻いてあるサンガに手をやる。

「そう言えば、それまだ切れてないのな」

「これが切れるのは、まだもうちょっと先だよ

「先？」

「ん。もつちよつとな

」のサンガはきっと何年か後、凜が夢を掴んだ時、そして……。

凛からは、本当にいろいろなことを教えてもらひつた。何よりも、走るひとの楽しさを思って出させてくれた。

頑張ることも教えてくれた。辛いことがあっても、逃げるんじゃないで、立ち向かって、乗り越えられたら、楽しいことが待ってるんだ。

それに気付かせてくれたのは凛、君だよ。だから俺、これからも頑張つていけそうな気がする。そして、いつか君を迎えに行くよ。

その日まで、少しの間待つてくれな？

ふと、空を見上げた。なんだか、神様も、笑っている気がした。

おわり

最終章　『旅立ち』（後書き）

今まで読んでくれた方、どうもありがとうございました。とうえず、これで完結です。

初めてつていうこともあって、なかなか難しいなと思わされる所もあつました。正直、よくここまでやり遂げられたなと思います。

で、主人公の悟ですが、実はちょっと自分につづらうと重ねてます。自分も中・高と陸上部でした。種田は違うんですけど。

それで、頑張つてないことはないんだけど、どうも本当に頑張れる気がしないつていうのをずっと感じて、その辺の引っ掛けたりが、今回書いて見よつて思つたきっかけでした。

最後に、読んでくれた皆さん、本当にありがとうございました。これを読んでくれて、少なからず何かを感じ取つてくれたら幸いです。また何か気が向いたら書くかもしないですが、その時はまたよろしくお願いします。

みづりこわお

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9089c/>

trying

2010年10月17日02時22分発行